

清水 文雄 著

随想集 統河の音

昭和四十二年三月発行「随想集 河の音」の続篇であり、前著刊行以後、雑誌・会報等に折々に掲載された随想89編の集成である。

本書は、清水先生のお人柄に触れ得る絶好の機会を与えてくれるものである。先生の人生に対する姿勢、そして人生を見つめる眼が、先生ご自身のみならず、先生と関わった全ての人々、あるいは出来事を、包み、温め、育んで、鮮やかに文章化されている。先生の胸を去来したさまざまな思いが、行間からにじみ出ており、森羅万象との関わりを大事にする中で、微視的にあるいは巨視的に、優しくあるいは厳しく物事を見つめておられる心眼が伝わってくる。まさに、人生の機微に触れ、人生のさまざまな断面図を垣間見る思いがする。先生の静かな、しかし鋭く深い洞察眼に感銘を禁じ得ないのである。

また、文章は流麗であり、張りのあるみずみずしい文章の中で、古典と現代とが混然一体となった情緒を醸し出し、独自の世界が構築されていると思う。細やかな感性と理知的な洞察・分析との統合された文章世界の中で、先生の心が静かに、しかし力強く息づいているようである。

本書は、先生のご人生の一端をうかがえる書であると同時に、先生ご自身を具現化し、投影したものである、ともいえるであろう。

(B6判、三五五ページ、昭和五九年一月一日、王朝文学の会刊、非売品)

(中峯 仙子)